



# 「坂の上の雲」から平成を読む

はじめに 1. 小さな日本が、なぜ大国ロシアに勝てたのか

2. 司馬遼太郎史観の問題点

(1)陸軍(乃木希典)考

(2)海軍(秋山真之と加藤友三郎)考

## I. 平成の国難を如何に克服すべきか(「坂の上の雲」から学ぶ)

### 1. 日露戦争時の日露両国の国力・軍事力の比較

- ①人口: 1億4000万対4000万 ②経済力: 20対1 予算規模: 12対1
- 鉄鋼生産: 100対12 現在の日露GDP比較 日本(2位)のロシア11位31.5%(2009年IMF)
- ③軍事力: 陸軍力: ロシア100万(総兵力600万) 日本32万(予備兵力100万)
- 海軍力(日本23.3万対ロシア35.1万)

### 2. 明治の国家指導者・国民(義に生きた「サムライ」日本の愛国心)

- (1)高貴なる者の義務(ノブレス・オブリージュ・Noblesse Oblige)
- ①明治天皇の妻: 昭憲皇太后のノブール・オブリージュの履行
- ②外国の例 英国・スウェーデン・オランダ・タイ王室 男子は軍務、女子は赤十字看護婦勤務
- (2)伊藤博文(恐露病者・日英同盟に反対)「山陰の海岸で一兵卒として戦う」(滅私奉公)
- (3)大山巖→陸軍大臣→陸軍参謀総長→満州派遣軍司令官(2階級降格の天下り)
- (4)児玉源太郎(陸軍、文部、内務大臣→参謀本部次長→満州派遣軍参謀長(4階級降格の天下り))
- (5)大山捨松(大山巖の妻・会津藩家老の娘・遺米5少女の1人、鹿鳴館の華、有志共立病院(慈恵医科大)



学付属看護婦教育所(ナイチンゲール看護学校)→横須賀海軍工廠付属横須賀共済病院  
付属看護婦養成所、赤十字社の創設、『不如帰』の母のモデル(瓜生繁子—小学校唱歌)

◎日赤看護婦の活動が人道主義国・文明国日本を世界に発信  
「日本の乙女」ハーフィーズ・イブラヒーム(エジプト)

砲火飛び散る戦いの最中にて、傷つきし兵士たちを看護せんと、  
うら若き日本の乙女、立ち働けり。牝鹿にも似て美しき汝、危なきかな。  
戦いの庭に死の影滴てるを、われは日本の乙女、鏡を持って戦う能わずも、  
身を挺して傷病兵に尽くすはわが務め、ミカドは祖国の勝利のために、  
死さえ教えて賜りき。わが民こぞりて力をあわせ、世界の優国たらんと力を尽くすなり。



### 3. 歴史観の確立(日本の歴史に対する自信と誇りの回復)

- (1)日露戦争の世界史的視点(英・歴史家ジョン・フラー)
  - ①白色人種の優越性が打破された戦争
  - ②全アジア・アフリカの民族を覚醒させた戦争
  - ③総ての植民地に徹底的打撃を与えた戦争
  - ④白色人種が有色人種に勝つという歴史的確信を打破した戦争
- (2)世界史に与えた第2の衝撃—第一次世界大戦
  - 国際連盟の常任理事国→人種平等法案の提出(ベルサイユ講和会議)
- (3)世界史に与えた第3の衝撃—大東亜戦争
  - 民族国家の独立と人種平等の実現→オバマ大統領の誕生、黒人指導者デ・ボイスの覚醒
  - 第二次大戦参加の黒人兵の不平等への不満→帰還兵の暴動(デトロイトなど)→人種平等運動の激化



(4)インドネシアの教科書が教える日本の戦争の総括: 「日本のロシアに対する勝利は、アジア民族に政治的自覚をもたらすとともに、…太陽の国が、いまだ闇の中にいたアジアに明るい光を与えたのである。日本は八紘一宇の旗印の下、世界支配に向けいっそう精を出した。神道に従って他の民族を指導する神聖な任務を帯びていると考えており、自らをアジア民族の兄貴分とみなし、弟たち、すなわち他のアジア諸民族を指導する義務があると主張した」  
(『世界の教科書シリーズ 20 インドネシアの歴史 高校歴史教科書』明石書店)

### 4. 昭和日本は何を間違えたか→世界情勢と国家(外交)戦略

#### (1)昭和日本の思想的誤判断



自由主義か社会主義か? 昭和不況と統制経済→「共産主義(国家社会主義)が歴史の必然」と誤断(陸軍統制派)

- ①ドイツの国家社会主義・ソ連の産業5カ年計画・米国のニューディール政策などの成功の影響→革新官僚と陸軍統制派
- ②日本の対応(国家体制)⇒社会主義統制国家の樹立—大政翼賛政治と国家総動員法

(思想・外交戦略)⇒アジア主義(大日本中華主義—天皇中心の大家族主義)



- (2)国際連合・多国間条約(ロカルノ条約・太平洋に関する4カ国条約・不戦条約)などの過信
- (3)外交戦略(同盟選択)の誤断: 日英同盟から日露協商、日独伊三国同盟と日露中立条約で英米に対抗
- (4)アジア主義×モンロー主義の対立→秋山真之(石原莞爾)高橋是清×加藤友三郎

### 5. 平成の国難→国家消滅

#### (1)平成の世界情勢

- ①多極の世界構造(大陸国家・中ソの連携)と(海洋国家・英米と半大陸国家独仏)
- ②経済的変動(通貨と資源)→過度の国際化→経済第一主義の限界(資本主義か国家社会主義か)
- ③国際機構・国際条約の限界→価値観の混乱(自由民主主義か国家社会主義か)
- (2)平成の選択と思想: 民主党(国家社会主義)と市民国家の建設と大東亜共栄圏(東アジア共同体)
  - ①国家統治と対決→「新しい公共」「地域分節主権」「官僚内閣制の打破」など
  - (参考文献: 松下圭一『政治・行政の考え方』、菅直人『大臣』いずれも岩波書店)
- (3)転落の推進者→政治家のポピュリズムとジャーナリズム

## II. 『坂の上の雲』・司馬遼太郎史観の問題点



- 1. 明治史の賞賛と昭和史と陸軍(乃木希典大将)の非難  
「坂の上の雲」を登った→西欧の帝国主義国と同列に並んだ→西欧との覇権争は必然(対策①石原莞爾か ②加藤友三郎か)
- (1)プロパガンダの戦争—観戦武官と従軍記者
  - ・従軍記者150名 従軍武官(陸軍31名)海軍(14名)
  - ・満州軍大山参謀長から山県参謀総長に新聞記者処遇の責任をとり辞表提出
  - ・旅順攻撃軍乃木司令官を外国武官・記者の報道管制に利用→乃木の過大評価化?
- (2)旅順攻略の歴史的意義から乃木を評価
  - ・レーニン「旅順港の降伏はツァーリズムの降伏の序幕である。戦争はまだかつては終わっていないが、新しい膨大な戦争、専制にたいする人民の戦争、自由のためのプロレタリアートの戦争の

時機は近づいてくる」(機関紙「フベリヨード」)

(3) 作戦上の評価と兵士の忠誠心

- ・セヴァストポリ要塞：英仏連合軍：349日、損害：英国3万3000、フランス8万2000人
- ・旅順要塞：155日、日本軍の損害：5万9304人
- ・日本軍の愛国心・忠誠心・突撃精神を賞賛
- ・ルーズヴェルト大統領：桜井温順『肉弾』に賞賛の手紙
- ・観戦武官：エジンバラ大学の名誉総長イアン・ハミルトン大將  
Ian Hamilton, A Staff Officers Scrapbook during the Russo-Japanese War. Vol. I.  
Official History of The Russo-Japanese War 1904-05, Naval and Military. vol. III.
- ・フランス：フランソワ・ド・スーグリエ將軍「旅順攻略戦は精神的な力、つまり克服しがたい自力本願、献身的な愛国心および騎士道的な死をも恐れぬ精神力による圧倒的な力の作用の教訓となる印象深い戦例」

(4) 乃木大將を賞賛する人と国(乃木神社は8社、東郷神社は2社)

- ①ポーランドの「nogi」(牧野伸顕「ポーランドの有頂天」『日本外交秘録』)
- ②ハンガリーの「コパチ・ノギ」デュナイ・イシュトワン(「日本への恋文」『文藝春秋』)
- ③イアン・ハミルトン大將(エジンバラ大学名誉総長)の回想録
- ④トルコのNogi名のある人物とNogi靴屋(イスタンブール)
- ⑤英米の乃木の評価・スタンレー・ウォッシュバーン『General Nogi(乃木)』1923年・再版・昭和45年)

4. 司馬遼太郎が『坂の上の雲』に書かなかつた秋山真之

(1) 秋山真之の脱イロコワ族化の努力

- ①秋山真之のアジア主義者(北進論者)の視点、孫文の支援と清朝の軍艦乗っ取り事件
- ②秋山真之の大アジア(パン・イスラム)主義者の視点、大本教の出口王仁三郎との接触
- ③対米戦(南洋群島の占領=第2艦隊の地中海派遣→石原完爾的な対米戦論者の視点)

(2) 秋山真之のアジア主義者と愛国心を無視

- ①秋山の愛国心をNHKと司馬遼太郎博物館は人命の尊さに置換
- ②「一身一家一郷を愛する者は悟道足りず、世界宇宙を愛する者は悟道過ぎたり(現在の日本?)。軍人は腔の愛情を君国に捧げるべきである」(秋山真之の勤務録「天剣漫録」から)

③坂本龍馬の尊皇「月と日の 昔を偲ぶ 湊川 流れて清き 菊の下水」

(3) 加藤友三郎・連合艦隊参謀長は日本を2度救ったとの評価は

- ①日露戦争の勝利の参謀長
- ②ワシントン軍縮会議で太平洋の平和

(4) 大東亜戦争はイロコワ族(日本退治) = 高橋是清(金輸出再禁止

軍事予算の増額などで、世界恐慌により世界最速で脱出→日英対立(2.26事件で暗殺・軍事予算の削減)

**おわりに**

1. 国家観の確立と自存自衛の国防力→大和に帰れ(聖徳太子に学べ、)

憲法、国家体制の確立→平城京、大仏、防人の充実←「古事記」「日本書紀」←歴史観の確立

2. 昭和の転落史の遺訓

同盟国の選択の錯誤→明治の『坂の上の雲』を平成の『坂の上の雲』へ→乃木の再評価を  
おわりに：論者の心境「老いてなお 命の限り 凜として われ書き語らん 日の本のため」

参考文献

拙書『日露戦争が変えた世界史』(芙蓉書房出版、2001年、絶版)

編著『日露戦争を世界はどう報じたか』(芙蓉書房出版、2010年)

